

## 連体修飾節の形容詞的用法と他動性

蔡 梅花\*

本稿では、形容詞的用法になりやすい動詞の特徴を、他動性という観点から統一的な説明を試みた。これは、形容詞的用法が「タ」形を取るか「テイル」形を取るかというアスペクトの形式を議論する以前の問題で、これまで言及されなかった問題である。

この論文では、形容詞的用法に現われやすい66個の動詞を対象に、それらの他動性の高低を検討した。他動性の高低を検討する際、「動作主の働きかけが対象に及び、且つ、対象が変化を被るかどうか」を第一基準とし、次に、「原型的他動詞文の特徴を持っているかどうか」を第二基準とした。この基準に基づくと、対象が変化を被る動詞の方が、他動性が高く、両方とも対象が変化を被る場合は、原型的他動詞文の特徴を多く持っている動詞の方が、他動性が高いと判断される。66個の動詞の他動性の高低を検討した結果、形容詞的用法に現われやすい動詞と他動性の関係に、次のような結果が得られた。

1. 形容詞的用法は、他動性の低い非対格動詞に現われやすい。
2. 形容詞的用法は、他動性の高い他動詞・非能格動詞には現われにくい。
3. 形容詞的用法は、他動詞であっても他動性の低い動詞なら形容詞的用法になれる。

この結果は、形容詞的用法になりやすい動詞の特徴について、統一的に説明ができる点で意義を持っている。

**キーワード**：形容詞的用法，他動性，対象の変化

### 1 はじめに

「タ」形と「テイル」形は、日本語のアスペクトの基本形式である。「タ」形と「テイル」形は、文末に現われた場合は、必ずアスペクトの対立をなしているが、連体修飾節ではその対立がなくなり、アスペクトから解放<sup>1</sup>される場合がある。この用法を形容詞的用法と呼ぶ。形容詞的用法は連体修飾節だからこそ起こる現象である。

例えば、

- (1) 皿が割れた。
- (2) 皿が割れている。

(1)の「タ」は「完了」のアスペクトを表わし、(2)の「テイル」は「継続」

\* サイ・バイカ、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程在学中、日本語学

<sup>1</sup> 高橋(2003)は、テンス、アスペクトを表わさない場合を、「テンスから解放される」または「アスペクトから解放される」と言っている。

のAspectを表わしている。しかし、それが連体修飾節になった場合、

- (3) 割れた皿。
- (4) 割れている皿。

の「タ」形と「テイル」形は、「完了」のAspectも「継続」のAspectも表わさなくなり、Aspectから解放される。

日本語の動詞にはAspect的な「テイル」の点から見ると、3つの種類がある。いつもAspect的解釈しかできない「歩く」「食べる」「飲む」「走る」などの動詞と、いつも形容詞的用法の解釈しかできない「優れる」「堂々とする」「馬鹿げる」「変な形をする」などの動詞、そして3つ目のグループとして文脈によって、両方の解釈ができる「着る」「掛ける」「変わる」「のんびりする」「太る」などの動詞が存在する。つまり、形容詞的用法は、すべての動詞に起こる現象ではない。形容詞的用法になる動詞とならない動詞が存在する。形容詞的用法になりやすい動詞とならない動詞の特徴は何か。この現象を統一的に説明できる理論はないのか、あるとしたらそれはどのようなものなのか。本稿ではこの問題をめぐって考察を行うことにする。

## 2 先行研究

形容詞的用法に関する研究は数多くあるが、本稿では代表的なものである寺村 (1984)、高橋 (2003) と、他の研究者とは違った「話者の認識」という観点からの研究である森田 (2002) を挙げる。

### 2.1 寺村 (1984)

寺村 (1984) は、典型的な形容詞的動詞<sup>2</sup>の場合、連体修飾節で「～タ」形になるのが普通であり、この「～タ」は、述定<sup>3</sup>での～テイルと同様テンスもAspectも表わしていないとし、これを「～テイルの縮約形～タ」と呼んでいる。

- (5) 馬鹿げた話 (\*馬鹿げている話) (p.197)
- (6) ごみごみした町の一劃に…… (ごみごみしている町の……) (p.197)
- (7) 生き生きした表情 (?生き生きしている表情) (p.197)

<sup>2</sup> 「典型的な形容詞的動詞」とは、～テイルという形が形容詞的にのみ使われるものを指す。「形容詞的」というのは、品定めの、性状規定的、その意味で形容詞のような、物事の様子、性質、形状、印象などを表わすことをいう (寺村 1984, p. 126)。

例えば：優れている、尖っている、馬鹿げている、しっかりしている、など  
形容詞的動詞の種類：(p. 143)

- (a) 堂々 (悠々、飄々、淡々、黙々、騒然、超然、憤然、……) トシテイル
- (b) ザラザラ (ツルツル、コリコリ、アッサリ、ヒンヤリ) シテイル
- (c) ～ナ形 (色、様子、顔、顔色、……) ヲシテイル

<sup>3</sup> 1 で「タ」形と「テイル」形は、述定で必ずAspectの対立を成すと述べたが、形容詞的動詞は、述定ではいつも「テイル」の形しか取らないので、「タ」形との対立がない。

また(8)～(11)のように、継続動詞、瞬間動詞<sup>4</sup>も形容詞的動詞のように使える場合があるが、この場合、(8)、(10)のように、「タ」形と「テイル」形両方可能なときと(9)、(11)のように、どちらか1つの形式しか許さないときがあることを指摘している。

- (8) よごれた繻帯を首に巻い(た／ている) 女が座っていたが、……  
(遠藤周作「札の辻」) (p.198)
- (9) 「生き(ている／\*た) 父親を、その後戦争で死んだと私たちに嘘を  
言っていたのも……私たちが父親と逢わせたくないためなんですわ」  
(円地文子「愛情の系譜」) (p.198)
- (10) 痩せ(た／ている) 背の高い、そして顔に陰のある案外年をとっ(た  
／ている) 女だった。(志賀直哉「暗夜行路」) (p.198)
- (11) ……海の波とは違って、いかにもお互いにぶつかり合っている感じ  
の小さい波の集まりを、一面に湛え(ている／\*た) 湖面が、海より  
黒っぽい色調で広がっていた。(井上靖「青衣の人」) (p.198)

しかし、文中に動作主が現われると、(12) (13) のように、「生きた」と「痩せた」の「タ」形は、「完了」のアスペクトを表わし、(14) (15) の「生きている」「痩せている」の「テイル」形は、「継続」のアスペクトを表わすことになる。

- (12) 鎮増が『私聞書』を残そうと決めた背景には、彼が生きた室町という時代に特有の観念があったのである。  
(田中貴子「室町お坊さん物語」)
- (13) 子供や主人も、私が痩せたことを喜んでくれているようで、「ママ、きれいになったね!」といます。(佐藤美津江「壮快」)
- (14) いまわたしたちが生きている時代・地域の社会問題・時事問題がわからないで、ひじょうに限られた断片的な史料から過去の問題が理解できるはずがありません。  
(早瀬晋三「歴史研究と地域研究のはざままで」)
- (15) 伸一は、炭鉱で働く青年たちに料理を勧めた。彼は、出発前に日本で会った時よりも、青年たちが痩せていることが、気になっていた。

<sup>4</sup> 金田一(1976)は、～テイルという形を取るか取らないか、取る場合は普通どういう意味になるかによって、動詞を4つに分類している。

- ①状態動詞：～テイルの形にならない。状態を表わす。  
ある、いる、できる、要する、など
- ②継続動詞：～テイルの形になり、動作の進行中であることを表わす。  
読む、書く、泣く、降る、など
- ③瞬間動詞：～テイルの形になり、動作、作用が終わってその結果が残存していることを表わす。  
死ぬ、消える、届く、決まる、など
- ④第四種の動詞：常に～テイルの形で用いられる。時間の観念を含まず、ある状態を帯びることを表わす。  
聳える、優れる、有り触れる、馬鹿げる、など

(池田大作「新・人間革命」)

(8)～(11)は、意味的に主格に当たるものが被修飾名詞になっているが、(12)～(15)は、主格が修飾部<sup>5</sup>に来ており、意味的に対象に当たるものが被修飾名詞になっている。主格が修飾部に現われるか、被修飾名詞に現われるかが、形容詞的用法になるかならないかと関係があるように思われる。これが本稿で検討すべき1つ目の問題点である。

## 2.2 高橋 (2003)

高橋 (2003) は、次のように述べている。

従属節がデキゴトをあらわしているあいだは、動詞は運動をあらわして、節の述語となり、相対的テンスではあっても、ともかくテンスのカテゴリーをもっているのだが、これが、デキゴトでなく、状態や性質をあらわすようになると、さらに動詞的なカテゴリーをうしなうことになる。(pp.229-230)

(16) 窓よりに置いたテーブルにむかって、(宮本百合子「道標」)(p.230)

(17) S字型に曲折した路が、(野上弥生子「真知子」)(p.230)

「置いたテーブル」の例では、誰が置いたかが問われず、動作から解放されているし、「曲折した道」の例では、初めから路は曲折などという変化をしていない。つまり、運動の過程における、どこかの局面を取り出して、それを外側からもしくは内側に入って見渡すのではないので、アスペクトから解放されていることになる。

また、動作から解放されるということは、ヴォイスからも解放されていると考えられるが、高橋 (2003) は、ヴォイスからの解放として捉えられる意味の変質に、次の3つの方向が認められるとしている。

- ① 他動性→自動性
- ② 運動性→状態性
- ③ デキゴト性→性質性<sup>6</sup>

このように、動詞が運動の意味を失うと、アスペクトのカテゴリーも存在し

<sup>5</sup>「修飾部」とは、「茶のはいった罐と急須」で「茶のはいった」が修飾部で、「罐と急須」が被修飾名詞になる。「修飾部」は寺村 (1993) によるものである。

<sup>6</sup>「デキゴト性→性質性」の変質は、連体形の中に多くの例が見られる。

- ・ 冷凍肉を切る包丁
- ・ 冷凍肉を切るのに使う包丁
- ・ ギザギザの付いた包丁
- ・ ギザギザになった包丁
- ・ 刃にギザギザを付けた包丁

これらの例において、連体動詞句は、この包丁を他から区別する特徴的な性質を拾い挙げただけのものであって、動作レベルでのヴォイス関係には無関心である。だから、形式的には能動動詞であっても、実質的にはヴォイスから解放されている(高橋 2003, p.155)。

ない。高橋の説は、動詞が述語としての機能を失くなるという、動詞の意味の面からアスペクトの解放を論じているところが他の研究者と異なっている。

### 2.3 森田 (2002)

森田 (2002) は、「～タ」の本質を「時間観念の上に乗って過去か否かを弁別する働きではなく、話者の認識の有り様を文脈に添えるものである」とした。例えば、

- (18) 明日いちばん早く学校へ来た生徒が、教室の窓を開けなさい。  
(p.282)

上の例文は、従来の説<sup>7</sup>だと、主節の事態より従属節の事態が先に起こるため、「タ」形が使われるという説明である。つまり、従属節のアスペクトの形式は相対的テンス<sup>8</sup>で決まるということである。しかし、森田は、話者の視点との関係で、未来のことなのに「タ」形が使われていることを説明できるとしている。話者の視点が「明日」にあつて、「明日」の「来た」時点で、その生徒の登校を確かなものとまず認識し、その認識があつて初めて「窓を開けなさい」という命令ができる、と述べている。

また、森田は、連体修飾節の「何々した何」形式の意味について、「赤い靴を履いている女の子」と「赤い靴を履いた女の子」は「赤い靴の女の子」に相当する、つまり、被修飾名詞の属性を表わすものとなり、その動詞本来の動作性の本義が文脈によって希薄になると、全体が1つの名詞と同様なものになり、最終的には連体詞へと辿り着くと述べている。

森田の説は、連体修飾節に使われた動詞が、その本来の動作性を失い、被修飾名詞の属性になる場合、形容詞的用法になる、このとき、「タ」形と「テイル」形は同じ意味を表わしているということである。森田の話者の認識の有り様と視点で連体修飾節の「タ」の特徴を分析したのは興味深いものである。

以上、形容詞的用法に関する先行研究を見た。形容詞的用法の問題については、動詞がアスペクト性を失うのはどういうときか、失いやすい動詞はどういう動詞か、ということが最大の問題である。

これらの先行研究を見ると、形容詞的用法になれる場合は、ばらばらであり、統一的な視点で説明がされていない。

寺村 (1984) は、どういう継続動詞と瞬間動詞が形容詞的動詞のように使えるのかの説明が無いし、森田 (2002) も、連体修飾節にどういふ動詞が来るとき属性を表わすことになるのかということについては説明がない。高橋 (2003) は、動詞が連体修飾節で状態や性質を表わす場合の例文を羅列しただけで、それらの動詞に共通している特徴については言及していない。

本稿では、これまで検討されなかつた他動性という観点から見ると、これらの現象がうまく捉えられる。そのことを、以下の章で示す。

## 3 調査

<sup>7</sup> 寺村秀夫 (1984) 所収の「‘タ’の意味と機能」。

<sup>8</sup> (相対的テンス) とは、主文の出来事時と従属文の出来事時、または設定時点との時間関係をいう。

### 3.1 使用コーパス

使用したコーパスは、次の通りである。

- ・ CD-ROM 版『新潮文庫の 100 冊』（1995）
- ・ 青空文庫
- ・ 日本ペンクラブ電子文藝館
- ・ 文庫本
- ・ 『朝日新聞記事のデータベース』<sup>9</sup>
- ・ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の「中納言」

### 3.2 データ収集の方法及び検討の方法

まず、3.1 で挙げたコーパスを利用して、形容詞的用法の用例を収集する。検索方法は、「た」「だ」「ている」「でいる」で検索して出てきたすべての用例の中から、3.3 の「形容詞的用法の認定法」に当てはまる用例だけを対象にした。

文庫本は、読みながら連体修飾節に現われた「た」「だ」「ている」「でいる」形を収集し、3.3 の「形容詞的用法の認定法」に当てはまる用例を対象にした。

次に、収集した形容詞的用法の用例の中から、用例数が 5 つ以上ある動詞を対象にし、それらの他動性をチェックする。それから、他動性と形容詞的用法のなりやすさにどういう関係があるのかを考察する。

### 3.3 形容詞的用法の認定法

形容詞的用法に使われるアスペクトの形式は「タ」形と「テイル」形である。形容詞的用法は、この「タ」形と「テイル」形がテンス、アスペクトから解放されるときに起こる。本稿では、収集した用例が形容詞的用法であるかどうかを、次の 4 つの項目を基準に判断を行った。

- ① 連体修飾節の「タ」形が「過去」の意味も「完了」の意味も表わさない。
  - (19) 十国峠からクネクネ曲がった道を下る途中で、ウシヤが気分が悪くなった。(林穰二「北欧に魅せられて」)
  - (20) 外を歩く時には、胸に黄色い布飾りや、角のように尖った帽子をかぶるように命じられる。(坂東真砂子「旅漕ぎの地」)
- ② 連体修飾節の「テイル」形が「継続」<sup>10</sup>の意味を表わさない。
  - (21) 他人より優れている分野は、どんな平凡な人間にも、ひとつやふたつはあるものです。  
(小宮山博仁「0 歳～6 歳で「本当の知能」を伸ばす本」)

<sup>9</sup> 2009.4.1.～2009.4.30 までの東京本社版、朝刊と夕刊の本文記事を対象にした。記事種別は、教育と解説の 2 つの分野に限った。

<sup>10</sup> 「テイル」の基本的意味には「動作継続」と「結果継続」がある。

- ・ 車が走っている。(動作継続)
- ・ 金魚が死んでいる。(結果継続)

- (22) 龍吉は、三里ほど離れている停車場のある町から帰ってきた。  
(布野栄一「小林多喜二の人と文学」)
- ③ 「タ」形と「テイル」形が交替可能な場合、意味の違いが生じない。
- (23) 皮のカバンに李子や山楂子を山のように詰め込んだ人、足をバタバタさせる生き(た／ている)鶏を袋に詰めて持ち込む人がいる。  
(井田真木子「小連の恋人」)
- (24) 肩のあたりが血で汚れ(ている／た)ジャケットをベッドに投げ、ムラキの向かいの椅子に腰をおろした。  
(笠井潔「ヴァンパイヤー戦争」)
- ④ 「タ」形と「テイル」形が交替不可能な場合でも、①②の項目に当てはまれば形容詞的用法とする。
- (25) 内藤はシューズの上に出(ている／\*た)赤い靴下を折りながら言った。(沢木耕太郎「一瞬の夏」)
- (26) 女の持っ(ている／\*た)最大の悪徳は、愚痴と嫉妬の心だと何かの本に書いてありました。(宮本輝「錦繡」)

筆者は、用例を収集するとき、上の4つの項目を基準にしたが、筆者自身は非日本語母語話者であり、またデータを扱う際に、客観性を重視するため、集めたデータを3人の日本語母語話者に見てもらい、形容詞的用法ではないと判断された継続動詞と瞬間動詞の用例は排除した。

### 3.4 結果

調査の結果、形容詞的用法の用例を3,495個収集した。具体的な用例数は表1に示した。

表1 形容詞的用法の用例数

数 アスペクトの形式	数	百分率	合計
「タ」形	2,780	80%	3,495
「テイル」形	715	20%	

しかし、これらの用例の中には、形容詞的用法が1例だけの動詞もあり、その動詞は形容詞的用法に現われやすいと言い難いため、以下の検討に当たっては、用例が5例以上ある66個の動詞を対象にした。

そして、まず、66個の動詞を自動詞と他動詞に分けた。それから自動詞を非対格動詞<sup>11</sup>、非能格動詞<sup>12</sup>、非対格・非能格動詞<sup>13</sup>に分けた。自動詞を非対格

<sup>11</sup> 非対格動詞は、主語指示物の非意図的事象を表わし、主語指示物の状態や位置の変化を表わす動詞が主であり、非対格動詞の主語の意味役割は、対象／主題である。項の取る文法関係は、唯一の項(典型的には「対象」)が主語となる。

例：・皿が割れる。





表3は、表2の動詞の区分ごとの百分率である。表3から、形容詞的用法に現われやすいのは自動詞で、82%を占めていることが分かる。そのうち非対格動詞が67%、非能格動詞が6%、非対格・非能格動詞が9%を占めている。他動詞は18%を占め、その中でも再帰動詞が12%を占めている。

表3 形容詞的用法に現われた動詞の百分率

	分類	動詞数	百分率	小計	百分率	全体数
自動詞	非対格動詞	44	67%	54	82%	66
	非能格動詞	4	6%			
	非対格・非能格動詞	6	9%			
他動詞	再帰動詞	8	12%	12	18%	
	意志動詞	4	6%			

表3のこのような数字を見ると、形容詞的用法になりやすいのは、自動詞では非対格自動詞、また他動詞では再帰動詞であることが分かる。再帰動詞以外の他動詞は形容詞的用法の用例は多くはない。

#### 4 形容詞的用法と他動性の関係

形容詞的用法に現われた12個の他動詞は、動作主の動作が対象に及ぶだけで、対象に変化を起こさない。この点が、典型的な他動詞と違うところである。対象が変化を被らないということは、他動性が低いことである。つまり、同じ他動詞であっても、その他動性の程度には強弱があり、すべての他動詞において一定ではない。

このことから他動性が高い動詞は、形容詞的用法になれないが、他動性が低い動詞は、形容詞的用法になりやすいと予想される。以下、形容詞的用法と他動性の関係について論じる。

筆者は、形容詞的用法に現われている動詞は、他動性との関係で共通しているものがあると考えているが、そうすると形容詞的用法のなりやすさと他動性の強弱はどういう関係にあるのか。これを探るためには表2の動詞の他動性をチェックする必要があると思われる。そこで、ここでは、他動性に関して、意味の側面と形の側面をはっきり区別したヤコブセン(1989)と角田(2009)の研究を見ることにする。また、他動性をチェックする際に、角田(2009)の「日本語における他動性」という他動性のチェック項目を参考にした。それを基準に66個の動詞の他動性を判断する。

##### 4.1 ヤコブセン(1989)

ヤコブセン(1989)は、他動詞文と自動詞文が明快に二分できるという伝統的な定義に対して、他動原型と自動原型のプロトタイプを挙げ、その周辺事例から、この2つの原型は、境界が不明確であり、且つ連続しているもので、動詞の形態面において連続体の両極端をなしているとしている。

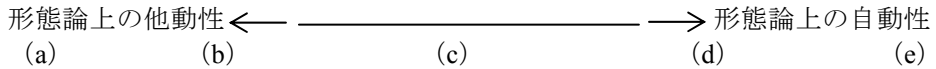


図1 形態面での他動原型と自動原型

- (a) 2つの独立している実体が係わっており、それぞれの意味的役割が異なっている。(赤ん坊が花瓶を壊す)
- (b) 2つの独立している実体が係わっており、それぞれの意味的役割が異なっているが、動詞の表わす変化の結果、それらが一体化される。(荷物を預かる)
- (c) 同一の実体(あるいは同一の実体の違った部分)が、2つの異なった意味的役割を担い、2つの違った名詞として文中に現われる。(再帰的意味)(犬が尻尾を垂れる)
- (d) 1つの実体のみが係わっており、それが1つの名詞句として文中に現われながらも、2つの違った意味的役割を担っている。(意図的自動詞)(お婆さんが屈む、敵が寄せる)
- (e) 係わっている実体が1つであり、その意味的役割も1つにすぎない。(非意図的自動詞)(花瓶が壊れる)

また、ヤコブセン(1989)は、他動原型における対象物の意味特徴と、可能文<sup>14</sup>、願望文<sup>15</sup>、他動的形容詞文<sup>16</sup>における対象物の意味特徴を次のようにまとめている(p.244)。

他動原型における対象物の意味特徴

- ・変化を被る。(変化性)
- ・変化は現実の、また特定の時点において生じる。(現実性)
- ・変化の成立は対象物以外のものによる。(対象物の非主体性)

可能文、願望文、他動的形容詞文における対象物の意味特徴

- ・対象物に変化が生じない。(不変化性、または状態性)
- ・述語の表わす事態が、現実の時間において成立せず、現実の時間と離れている、またはそれを超越していると解釈される。(非現実性)
- ・述語の表わす事態が、対象物そのものに存在する属性と見なされる。(対象物の主体性)

他動原型から、可能文、願望文、他動的形容詞文へと移行するにつれて、この意味的逸脱によって、形式の面でも2つの変更が伴う。ひとつは、対象物が「を」格を取ることから「が」格を取るように変わる点であり、もう1つは、

<sup>14</sup> 可能文：・このチェーンははずれる(ようにできている)。

<sup>15</sup> 願望文：・僕は水が(を)飲みたい。

<sup>16</sup> 他動的形容詞文：・僕は犬が怖い。

述語の形態が他動原型の場合には完全に動詞的であるのに対して、意味が他動原型から逸脱することによって、形容詞の側に傾いてくるという点である (p.245)。

上のヤコブセン (1989) の他動原型を見ると、(a) から (e) に行くにつれ、他動性が低くなる。(a) は典型的な他動詞で、他動性が一番高く、(e) は典型的な自動詞で、他動性が一番低いことになる。

ヤコブセン (1989) の他動原型は、形と意味の側面をはっきり区別することで、他動原型と自動原型から外れた中間的なものたちの位置づけができた。本稿では、形容詞的用法に現われた動詞をヤコブセンの他動原型に位置づけをし、これらの動詞と他動性にどういう関係があるのかを見る。また、形容詞的用法のなりやすさともどういう関係があるのかを見たい。

#### 4.2 角田 (2009) の他動性の定義

角田 (2009) によると、他動性とは、自動詞文との関係も含めて、他動詞文に関する言語現象一般を指す (p.67)。角田 (2009) では、他動性の「伝統的な定義」(Hartmann and Stork; Richards et. al) を次のようにまとめている。

##### 伝統的な他動性の定義

- (a) 他動詞文には目的語がある。動作が主語から目的語に向かう。(更に、目的語は動作を被る、或いは、他動詞文は受動文には変えることができる、等と述べている場合もある。)
- (b) 自動詞文には目的語がない。動作は何にも、向かわない。(p.67)

しかし、「伝統的な定義」はさまざまな問題点があり、この問題点を克服しようとした定義に角田 (2009) がある。角田は、世界のどの言語にも適用できる定義を提案している。

##### 「伝統的な定義」の問題点

- ① 動作が主語から目的語に向かわない場合がある。  
例：ジョンがメアリーを見た。
- ② 受動文に変えることができない場合がある。  
例：ジョンは沢山、本を持っている。(能動文)  
\*多くの本がジョンに持たれている。(受動文)
- ③ 自動詞文でありながら、動作が相手に及んでいる場合がある。  
例：エドがスーにぶつかった。

角田は、上に挙げた問題点を避けるために、意味の側面と形の側面をはっきり区別した他動詞文の原型、即ち、他動詞文らしい他動詞文というものを設定した。

他動性の原型の意味的側面：参加者が 2 人 (動作者と動作の対象) またはそれ以上いる。動作者の動作が対象に及び、且つ、対象に変化を起こす。(動作者と対象は無生物の場合も

ある。従って、2人でなく、2つの場合もある。) (p.77)  
他動性の原型の形の側面：或る言語における他動性の原型の形の側面とは、  
意味的に他動詞文の原型であるものがその言語で  
持っている文法的特徴である。

他動詞文の原型の形の面には次の現象等がある。  
(i) 項の数, (ii) 品詞, (iii) 格, (iv) ボイス,  
(v) アスペクト, (vi) 動詞の活用, (vii) 動詞の  
派生, (viii) 動詞による一致, (ix) 助動詞の選択,  
(x) 語順。(p.78)

角田は、他動性の定義を提案するとき、他動詞文と自動詞文は明快に区別できないで、連続体をなしている点に注意している。

この他動詞文と自動詞文の連続体について、「もし自動性は他動性の逆の性質を持つと考えると自動性の原型は動作でもなく、変化でもない。即ち状態である。従って、「花子は元気だ」は原型的自動詞文である。

他動詞文の場合、ただ動作が対象に及ぶだけのものよりも、動作が対象に及び、且つ、対象に変化を起こすものの方が他動性が高いと見なす。すると、逆に変化の方が動作よりも自動性が低いと見なすことが可能である。従って動作は状態と変化の間に来る」(p.91)とし、自動性の程度を図2のようにまとめている。

自動性の原型：状態

自動性の程度：

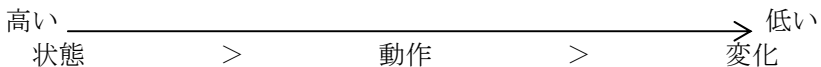


図2 自動性の程度と意味の関係

ここまで、他動性に関する研究を見てきたが、他動性の高低を判断するとき、最も大事なものは、動作主の働きかけが対象に及び、且つ対象が変化を被るかかどうかという点である。同じ他動詞である「割る」と「叩く」を比べたとき、どちらの他動性が高いのかというと、「割る」の方が他動性が高い。それは、「割る」は、動作主の働きかけが対象に及び、且つ対象が変化を被るが、「叩く」は、動作主の働きかけが対象に及ぶだけで、対象は変化を被らないからである。

本稿では、形容詞的用法に現われた動詞を他動性の高低で位置づける際に、上に述べたヤコブセン(1989)の「形態面での他動原型と自動原型」を参考にする。そして、形容詞的用法に現われた動詞の他動性を調べる時、上に述べた角田(2009)の「他動性の原型の意味的側面」、つまり、動作主の働きかけが対象に及び、且つ対象が変化を被るかかどうかという点を重要な基準とする。

この基準に従うと、他動性が高い動詞は、対象が変化を被るという特徴を持っていることになる。そうすると、他動性が低い動詞は、図1のように「状態を表わす動詞」という特徴を持つことになる。典型的な他動詞が「変化」の方

で、典型的な自動詞が「状態」の方にあり、この両者の中間を他動詞と自動詞のプロトタイプから離れている周動的な動詞が占めることになる。

### 4.3 形容詞的用法に現われた動詞の他動性

#### 4.3.1 3つの動詞グループの特徴

以上のように考えると、自動詞文は「動作」「変化」「状態」の3つの意味のうちどれかを表わすことになり、他動詞文は「動作」の意味を表わすことになる。

- (27) 花子が泣いた。(動作)
- (28) 電気が消えた。(変化)
- (29) 山が聳えている。(状態)
- (30) 花子が花瓶を壊した。(動作)

筆者は、形容詞的用法に使われた動詞を、動詞の語彙的意味を基準に、表4に示すように、3つのグループに分けた。形容詞的用法に現われた動詞は、最終的には状態を表わしているが、元々状態なのか、変化後状態なのか、それとも動作後状態なのかという点で異なっている。

表4 動詞の語彙的意味による3つのグループ

グループ1	変化後 状態	上がる	下がる	詰まる	痩せる
		褪せる	咲く	濡れる	破れる
		固まる	死ぬ	伸びる	汚れる
		腐る	白ける	生える	
		枯れる	煤ける	冷える	
		乾く	染まる	太る	
		消える	亡くなる	焼ける	
グループ2	動作後 状態	集まる	下げる	抱く	乗る
		落ちる	沈む	立つ	穿く
		抱える	過ぎ去る	経つ	入る
		掛ける	過ぎる	閉じる	ぶら下がる
		被る	座る	並ぶ	持つ
		着る	背負う	握る	
		来る	倒れる	残す	
グループ3	状態	空く	決まる	慣れる	広がる
		映る	籠もる	残る	交じる
		掛かる	付く	載る	まとまる
		変わる	出る	離れる	別れる

「変化後状態」のグループに属している動詞は、変化が関与している。このグループの動詞は、変化完了後その「変化が続く」ことが特徴である。

例えば、図3では、点線の部分で変化が生じる。点線の部分に時間の幅があ

るのは、変化が瞬間に終わる動詞<sup>17</sup>と、変化が終わるまで時間が掛かる動詞<sup>18</sup>があるからである。変化が完了した後は、「死んでいる」状態が続いているが、この「変化が続く」ことが、このグループの動詞の特徴である。

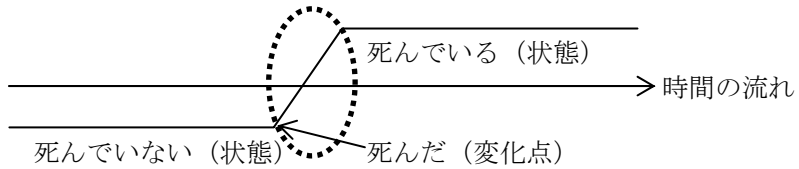


図3 「死んでいる」状態に至るまでの過程

「動作後状態」のグループに属している動詞は、動作完了に至るまで動作を伴うことが特徴である。このグループは、移動<sup>19</sup>を表わす動詞と動作を表わす動詞で構成されている。例えば、「集まる」「落ちる」「来る」「沈む」「過ぎ去る」「過ぎる」「経つ」「乗る」「入る」は、移動を表わす動詞で、移動の過程は動作を伴っている。「座る」「倒れる」「立つ」は、主体の位置変化がないという点では「集まる」「入る」などの動詞と違っているが、上下の方向と前後もしくは横の方向の移動があるので、移動と動作が伴う。図4は、「来る」を例にしたものである。

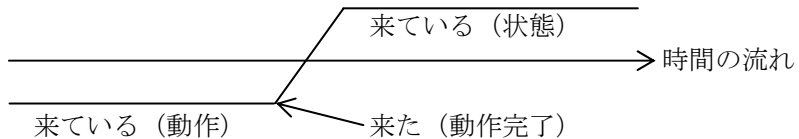


図4 「来ている」状態に至るまでの過程

この移動を表わす「集まる」「落ちる」「来る」「沈む」「過ぎ去る」「過ぎる」「座る」「倒れる」「立つ」「経つ」「乗る」「入る」という12個の動詞以外は、すべて他動詞である。他動詞は、動作主の対象への働きかけを表わす動詞で、動作が関与していることはいまでもない。

他動詞の中でも再帰動詞が多いが、再帰動詞の場合は、図5と図6のように2つの可能性がある。図5は、図4と同様の過程を持ち、図6は、「着る」という動作が完了する前の段階を表わしたものであるが、いずれは「着る」という動作が完了し、「着ている」状態になるとするのが一般的な考えであると思う。いつまでも「着ている」動作が続いているとは考えにくいからである。

<sup>17</sup> 「死ぬ」「消える」「(電灯が)つく」等は、変化が瞬間に終わってしまう動詞である。

<sup>18</sup> 「固まる」「溶ける」「痩せる」等は、変化が終わるまである程度の時間の幅を要する動詞である。

<sup>19</sup> 移動とは、ある場所から他の場所へと位置を変えることである。移動動詞とは、主体の位置を変えるような動作を表わす動詞である。

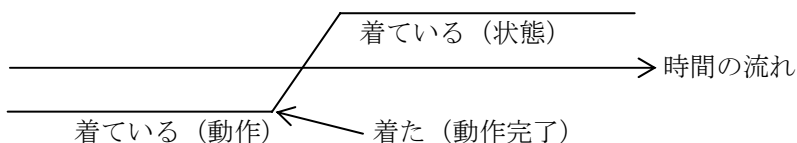


図5「着ている」状態に至るまでの過程1

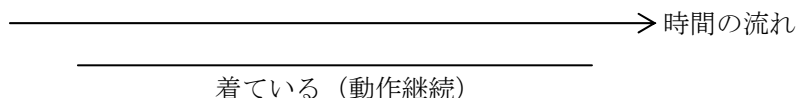


図6「着ている」状態に至るまでの過程2

それから、変化も動作も関与していない動詞をグループ3にした。このグループの動詞は、元から状態を表わしていることから、「状態」と名づけた。「状態」のグループに属している動詞の特徴は、主体の状態に変化を生じさせないことである。この点が、「変化後状態」のグループに属している動詞と違うところである。

例えば、「距離が離れている」では、主体である「距離」は変化しない。仮にAとBという2つの地点があり、AとBが離れているとしよう。そうすると、「AとBが離れている」というのは、元々の「状態」を表わしている。図示すると、図7のようになる。

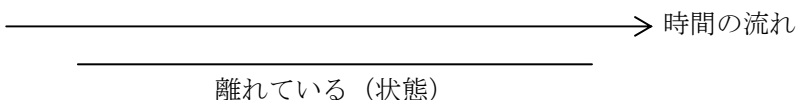


図7「離れている」状態

#### 4.3.2 「変化後状態」のグループに属する動詞の他動性

以下は、表4の3つの動詞グループの他動性を検討したものである。表5、表7、表9は、グループ1、グループ2、グループ3の動詞の例文<sup>20</sup>を挙げたもので、表6、表8、表10は、その他動性をチェックしたものである。

まず、「変化後状態」のグループ1に属している動詞の他動性を検討することにする。表5は、グループ1に属するすべての動詞の例文である。動詞の順番は、五十音順である。以下、表6から表10の動詞の順番も同じである。

表5 グループ1に属する動詞の例文

上がる：物価が上がる。	染まる：色が染まる。
褪せる：色が褪せる。	詰まる：下水道が詰まる。
固まる：ゼリーが固まる。	亡くなる：父が亡くなる。

<sup>20</sup> 例文は、すべて作例である。

枯れる：葉っぱが枯れる。	濡れる：髪が濡れる。
乾く：洗濯物が乾く。	伸びる：背が伸びる。
消える：虹が消える。	生える：草が生える。
腐る：野菜が腐る。	冷える：足が冷える。
下がる：水位が下がる。	太る：下半身が太る。
咲く：花が咲く。	焼ける：パンが焼ける。
死ぬ：猫が死ぬ。	痩せる：顔が痩せる。
白ける：壁紙が白ける。	破れる：鼓膜が破れる。
煤ける：天井が煤ける。	汚れる：手が汚れる。

**表5**の動詞は、「変化後状態」のグループに属している動詞で、すべて非対格動詞である。このグループの動詞は、変化が完了した後、その「変化が続く」特徴を持っている。

例えば、「色が褪せる」は、変化が生じる前の濃かった色が、変化が生じた後は、色が薄くなり、その「色の薄い状態」が続いている。「濡れる」も変化前の「乾いている状態」から変化後は「水浸しの状態」に変わり、その「水浸しの状態」が続くことになる。「太る」も、変化前の「痩せている状態」から変化後の「太っている状態」に変化し、その「太っている状態」が続いている。「焼ける」「破れる」「汚れる」等、他の動詞も同様である。

**表6**は、**表5**の動詞の他動性を検討したものであるが、他動性をチェックする際に、角田(2009)の意味の側面と形の側面の項目を参考にした(pp.80-83)。

角田(2009)の「日本語における他動性」の意味の側面には、①「参加者二人以上」、②「動作が及ぶ」、③「変化を起こす」という3つの項目があり、形の側面には、①「が+を」、②「直接受動文」<sup>21</sup>、③「間接受動文」<sup>22</sup>、④「再帰文」<sup>23</sup>、⑤「相互文」<sup>24</sup>の5つの項目がある。この意味の側面と形の側面の8つの原型的他動詞文の特徴を持っていれば「+」で示し、持っていなければ「-」

<sup>21</sup> 直接受動文とは、対応する能動文がある受動文をいう。

- ・ 次郎が太郎に殴られた。(直接受動文)
- ・ 太郎が次郎を殴った。(能動文)

<sup>22</sup> 間接受動文とは、対応する能動文がない受動文をいう。

- ・ 私は雨に降られて風邪を引いてしまった。(間接受動文)
- ・ \*雨が私を降る。

<sup>23</sup> 再帰文とは、動作主体自らに向けられる動作を意味する文である。「自分を…する」という意味を表わす。

- ・ 太郎は自分を責めた。

<sup>24</sup> 相互文とは、次のような対立関係にある文をいう。対をなす2つの文は、同一の事象を表わしている。

- ・ 太郎は花子と結婚した。
- ・ 花子は太郎と結婚した。

相互文を作る動詞は、相互性を備えた動詞で、「合う」「争う」「似る」「接する」「相談する」等と、接尾辞「あう」を持つ合成語である。「殴り合う」「信じ合う」「認め合う」「話し合う」等がある。但し、「あう」をつけた場合、動詞本来の意味が変わってしまう合成語は対象外とする。例えば、「落ち合う」や「掛け合う」などがある。



で示す。「+」「-」の判断は、筆者自身が行った<sup>25</sup>。  
これを参考に表6を作成した。

**表6 グループ1に属する動詞の他動性**

	意味の側面			形の側面				
	参加者 二人 以上	動作が 及ぶ	変化を 起こす	「が +を」	直接 受動文	間接 受動文	再 帰文	相 互文
上がる	-	-	-	-	-	-	-	-
褪せる	-	-	-	-	-	-	-	-
固まる	-	-	-	-	-	-	-	-
枯れる	-	-	-	-	-	-	-	-
乾く	-	-	-	-	-	-	-	-
消える	-	-	-	-	-	-	-	-
腐る	-	-	-	-	-	-	-	-
下がる	-	-	-	-	-	-	-	-
咲く	-	-	-	-	-	-	-	-
死ぬ	-	-	-	-	-	+	-	-
白ける	-	-	-	-	-	-	-	-
煤ける	-	-	-	-	-	-	-	-
染まる	-	-	-	-	-	-	-	-
詰まる	-	-	-	-	-	-	-	-
亡くなる	-	-	-	-	-	+	-	-
濡れる	-	-	-	-	-	-	-	-
伸びる	-	-	-	-	-	-	-	-
生える	-	-	-	-	-	-	-	-
冷える	-	-	-	-	-	-	-	-
太る	-	-	-	-	-	-	-	-
焼ける	-	-	-	-	-	-	-	-
痩せる	-	-	-	-	-	-	-	-
破れる	-	-	-	-	-	-	-	-
汚れる	-	-	-	-	-	-	-	-

表6から、「変化後状態」のグループに属している動詞は、原型的他動詞文の特徴を持っていないものが多く、他動性が非常に低いことが分かる。

そのうち、「死ぬ」と「亡くなる」だけが、「間接受動文」を作れるという特徴を持っているが、それは、他の動詞の主体が非情物であるのに対し、「死ぬ」「亡くなる」の主体は、人や有情物であるからである。これは、日本語の受動文では、一般的に非情物が主語になれないという規則からくるものだと考えら

<sup>25</sup> 形の側面の「間接受動文」という項目は、間接受動文が作れるかどうかを筆者自身が判断し、インターネットでそういう言い方があるかどうかを確認した。

れる<sup>26</sup>。「死ぬ」「亡くなる」が間接受動文になれるのも<sup>27</sup>、主体が迷惑や被害を被った場合に限られるので、原型的他動詞文の特徴を1つ持っているだけで他動性が高いとは言い難い。「死ぬ」と「亡くなる」は、間接受動文が作れるという他動詞文の特徴を持っている点では、このグループの他の動詞より他動性が高いが、他の原型的他動詞文の特徴をほとんど持っていないことから、全体的には他動性が低いと言える。

#### 4.3.3 「動作後状態」のグループに属する動詞の他動性

次は、「動作後状態」のグループ2に属している動詞の他動性を検討する。表7は、グループ2に属するすべての動詞の例文である。

表7 グループ2に属する動詞の例文

集まる：人が集まる。	倒れる：従業員が倒れる。
落ちる：石が落ちる。	抱く：女性が子供を抱く。
抱える：女性が子供を抱える。	立つ：太郎が立つ。
掛ける：太郎が眼鏡を掛ける。	経つ：時間が経つ。
被る：太郎が帽子を被る。	閉じる：太郎が目を閉じる。
着る：花子が着物を着る。	並ぶ：人が並ぶ。
来る：太郎が来る。	握る：太郎が鉛筆を握る。
下げる：太郎がカバンを下げる。	残す：太郎がご飯を残す。
沈む：船が沈む。	乗る：太郎が車に乗る。
過ぎ去る：ときが過ぎ去る。	入る：太郎が部屋に入る。
過ぎる：ときが過ぎる。	穿く：花子がスカートを穿く。
座る：子供が座る。	ぶら下がる：さるがぶら下がる。
背負う：太郎が荷物を背負う。	持つ：花子がカバンを持つ。

「動作後状態」のグループには、自動詞が13個と他動詞が12個ある。4.3.2の「変化後状態」のグループに比べて、他動詞が多く含まれているが、これらの他動詞にはある特徴がある。12個のうち8個が再帰動詞である。再帰動詞は、ヤコブセン(1989)の図1「形態面での他動原型と自動原型」で(c)に当たる動詞で、両極端をなしている典型的な他動詞と典型的な自動詞の間に位置している。再帰動詞は、形態面では他動詞と同様の格構造を持っているが、意味の面では他動詞と違う性質を持っている。動作主の対象への働きかけ及び対象が変化を被るかどうかという点で他動詞と違っているが、これは、他動性の高低にも繋がる。

<sup>26</sup> 一般的な事実を述べたり、動作主が不問であったり、特定できない場合は、例外である。

- ・ 運動会が開かれる。
- ・ この本は、多くの人に読まれている。

<sup>27</sup> 「死ぬ」の間接受動文：

- ・ 私は、幼い頃母に死なれて、寂しい思いをした。

「亡くなる」の間接受動文：

- ・ 彼は少年の時、父に亡くなられて、母の手一でに育ちました。

表 8 は、グループ 2 に属している動詞の他動性を検討したものである。

表 8 グループ 2 に属する動詞の他動性

	意味の側面			形の側面				
	参加者 二人 以上	動作が 及ぶ	変化を 起こす	「が +を」	直接 受動文	間接 受動文	再 帰文	相 互文
集まる	—	—	—	—	—	+	—	+
落ちる	—	—	—	—	—	—	—	—
抱える	+	+	—	+	+	+	—	+
掛ける	+	+	—	+	—	+	—	—
被る	+	+	—	+	—	+	—	—
着る	+	+	—	+	—	+	—	—
来る	—	—	—	—	—	+	—	—
下げる	+	+	—	+	—	—	—	—
沈む	—	—	—	—	—	—	—	—
過ぎ去る	—	—	—	—	—	—	—	—
過ぎる	—	—	—	—	—	—	—	—
座る	—	—	—	—	—	+	—	+
背負う	+	+	—	+	—	—	—	—
倒れる	—	—	—	—	—	+	—	—
抱く	+	+	—	+	+	+	—	+
立つ	—	—	—	—	—	+	—	—
経つ	—	—	—	—	—	—	—	—
閉じる	+	+	+	+	—	—	+	—
並ぶ	—	—	—	—	—	+	—	+
握る	+	+	—	+	—	+	+	+
残す	+	—	—	+	—	+	—	—
乗る	+	—	—	—	—	+	—	+
入る	+	—	—	—	—	+	—	—
穿く	+	+	—	+	—	+	—	—
ぶら下がる	—	—	—	—	—	—	—	—
持つ	+	+	—	+	—	+	—	+

表 8 を原型的他動詞文の特徴を持っていない動詞から多く持っている動詞の順に並べ替えると次のようになる<sup>28</sup>。

+0：落ちる，沈む，過ぎ去る，過ぎる，経つ，ぶら下がる

+1：来る，倒れる，立つ

<sup>28</sup> 原型的他動詞文の特徴を 1 つ持っている動詞は，+1 と表わし，2 つ，3 つ，4 つ，5 つ，6 つ持っている動詞は，+2，+3，+4，+5，+6 と表わす。特徴を持っていない動詞は，+0 と表わす。

- +2 : 集まる, 座る, 並ぶ, 入る
- +3 : 下げる, 背負う, 残す, 乗る
- +4 : 掛ける, 被る, 着る, 穿く
- +5 : 閉じる, 持つ
- +6 : 抱える, 抱く, 握る

原型的他動詞文の特徴を多く持っているほど他動性が高いということになるが、他動性が高いか低いかを判断する際に最も重要な基準となる項目がある。それは、意味の側面の、動作主の働きかけが対象に及び、且つ対象が変化を被るかどうかという点である。

したがって、他動性の高低を判断するとき、まず、「対象が変化を起こすかどうか」を第一判断基準とし、次に、原型的他動詞文の特徴を多く持っているかどうかを基準にした方がいいと思われる。この方法で、「動作後状態」のグループに属している動詞の他動性の高低を判断すると、「閉じる」が「動作主の働きかけが対象に及び、且つ、対象が変化を起こす」という特徴を持っているので、他動性が一番高いことになる。それ以外の動詞は、原型的他動詞文の特徴を多く持っているかどうかで他動性の高低を判断することになるが、その他動性の高低を図8に示した。

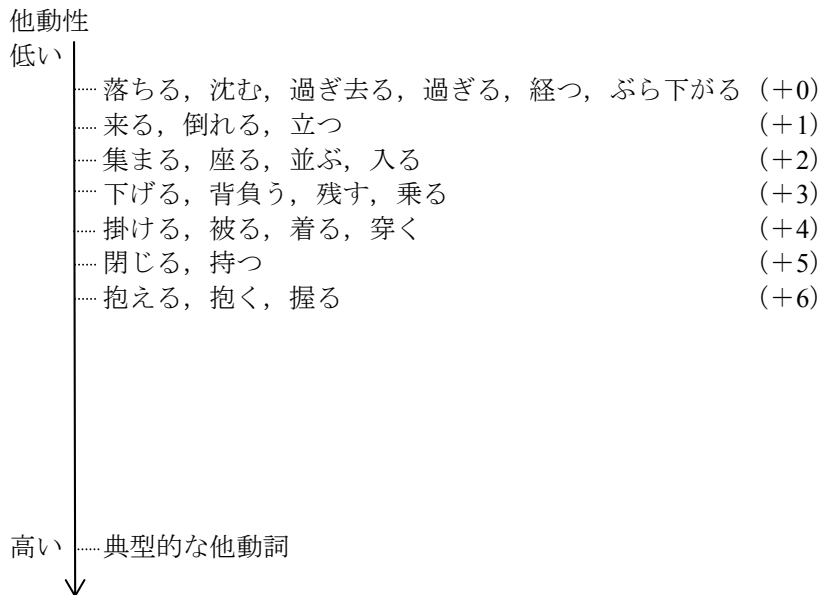


図8 グループ2に属する動詞の他動性の高低

図8を見ると、原型的他動詞文の特徴をゼロから2つまで持っている動詞は、すべて自動詞で、他動詞文の特徴を4つから6つまで持っている動詞は、すべて他動詞であることが分かる。他動性が高い方向に行けば行くほど、典型的な他動詞に近づくことになる。

しかし、筆者は、「他動性が高い動詞は、形容詞的用法になれない」と予想しているが、このグループには、12個の他動詞が形容詞的用法に現われている

る。表 1 で示したように、形容詞的用法に現われた他動詞は全体の 18%を占めていて、このうち、再帰動詞が 8 個で 12%を占めている。他動詞である再帰動詞が形容詞的用法に現われやすいのは、なぜなのか。以下、それを詳しく見ていくことにする。

図 8 から、再帰動詞は自動詞より他動性が高いことが分かる。しかし、典型的な他動詞と比べたとき、どうなのか。典型的な他動詞は、動作が対象に及び、且つ、対象に変化を起こす動作を表わす動詞で、「殺す」「壊す」「作る」「溶かす」「割る」等が典型的な他動詞である。

例えば、

- (31) 太郎がおもちゃを壊す。
- (32) 太郎が皿を割る。

という文では、動作主である「太郎」が、対象である「おもちゃ」や「皿」に働きかけ、その結果、対象である「おもちゃ」や「皿」が「壊れる」「割れる」状態になる。つまり、動作主の働きかけによって、対象が変化する。これが典型的な他動詞である。それに対して、

- (33) 太郎が眼鏡を掛ける。
- (34) 花子が着物を着る。

(33) (34) の再帰動詞の場合は、動作主である「太郎」や「花子」が、対象である「眼鏡」や「着物」に働きかけるが、対象である「眼鏡」や「着物」には何の変化も生じない。動作主の働きかけによって、対象が変化するのではなく、動作主自身が変化を受ける。再帰動詞のこういうところが自動詞に似ている。

仁田 (2010) は、「再帰動詞は、自動詞に近くなる。再帰動詞は、自動詞と典型的な他動詞との間に位置する存在である」と指摘している。仁田は、再帰動詞が典型的な他動詞から離れて、自動詞へ近づいていることの 1 つの現われとして、自動詞と他動詞の対応で説明している。

「浴びる」や「着る」は再帰動詞で、それに対応する使役動詞と使役-他動性動詞（三項を必要とする複他動詞）を持っている。「浴びさせる」「着させる」は使役動詞で、「浴びせる」「着せる」は使役-他動性動詞である。しかし、典型的な他動詞「割る」には、対応する使役動詞はあるが、対応する使役-他動性動詞は存在しない（「割らせる」）。これは、他動詞が必要とするのは、対応する自動詞であって、別の他動性の動詞を必要としないからである。自動詞も同様、もし必要とするなら、対応する他動詞であって、別の自動詞を所有する必要がないのである。再帰動詞が、自らに対応する自動詞が存在しないということは、再帰動詞自身が自動詞に似ている性質を持っているものであると考えられる。

以上のことから、再帰動詞は、形の側面では、典型的な他動詞と同様「が＋を」の格構造を持っているが、意味の側面では、典型的な他動詞と違って、自動詞に似ていることが分かる。典型的な他動詞は、動作主の働きかけが対象に

及び、且つ、対象が変化を被るが、再帰動詞の場合は、動作主の働きかけが対象に及ぶだけで、対象に変化を生じさせない。この点が、他動性の高低を判断する最も大事な基準でもあるので、典型的な他動詞は他動性が高く、再帰動詞は典型的な他動詞より他動性が低いことになる。

典型的な他動詞と再帰動詞の他動性に差があると述べたが、同じ再帰動詞の中にも他動性の高低が存在する。図8を見ると、「閉じる」が再帰動詞の中で他動性が一番高いが、「閉じる」は他の再帰動詞と違うところがある。

(35)～(42)は、形容詞的用法に現われている再帰動詞の作例である。

- (35) 太郎が目を閉じる。
- (36) 女性が子供を抱える。
- (37) 太郎が眼鏡を掛ける。
- (38) 太郎が帽子を被る。
- (39) 花子が着物を着る。
- (40) 太郎が荷物を背負う。
- (41) 女性が子供を抱く。
- (42) 花子がスカートを穿く。

他の再帰動詞は、意味的役割が異なっている2つの独立している実体「動作主」と「対象」が係わっているが、「閉じる」は「対象」が「動作主」の一部であり、同一の実体の違った部分が2つの異なった意味的役割を担っている。

(36)～(42)の対象は、動作主の働きかけを受けるが、変化は被らない。(35)の対象「目」は、動作主「太郎」の働きかけによって変化を被るが、その変化は(32)の「皿」が割れるほどの変化ではない。ただ「開いた状態」から「閉じた状態」になるだけであって、「閉じた状態」から「開いた状態」に戻することもできる。しかし、(32)の場合は、「割れた状態」から元の状態には戻れない。このように、他動性の高低は、対象が変化を被る程度にも影響されると考えられる。

再帰動詞以外に形容詞的用法に現われている他動詞は、「下げる」「握る」「残す」「持つ」である。

- (43) 太郎がカバンを下げる。
- (44) 太郎が鉛筆を握る。
- (45) 太郎がご飯を残す。
- (46) 花子がカバンを持つ。

この4つの他動詞も、対象が動作主の働きかけを受けるだけで、変化を被らないことから、典型的な他動詞より他動性が低いと言える。「下げる」「残す」の他動性は、自動詞「乗る」と同じレベルで、「握る」「持つ」は、再帰動詞「閉じる」より他動性が低い。このことから、「下げる」「残す」「握る」「持つ」も、形の面では他動詞であるが、意味の面では対象が変化を被らないので他動性が低いことになる。

以上のことをまとめると、同じ他動詞であっても、その他動性は一定ではなく、「対象が変化を被るかどうか」「対象の変化程度はどうか」の要因によ

って他動性の程度に差が生じる。再帰動詞が形容詞的用法に現われやすいのも、再帰動詞が自動詞に似ている性質を持った他動性の低い動詞であるからだと考えられる。

#### 4.3.4 「状態」のグループに属する動詞の他動性

最後は、「状態」のグループ3に属している動詞の他動性について検討する。

表9は、グループ3に属するすべての動詞の例文である。

表9 グループ3に属する動詞の例文

空く：部屋が空く。	慣れる：手付きが慣れる。
映る：顔が映る。	残る：ご飯が残る。
掛かる：お金が掛かる。	載る：小説が載る。
変わる：性格が変わっている。	離れる：距離が離れる。
決まる：時間が決まる。	広がる：空間が広がる。
籠もる：匂いが籠もる。	交じる：雑草が交じる。
付く：ほこりが付く。	まとまる：髪がまとまる。
出る：足が出る。	別れる：道が別れる。

グループ3に属している動詞は、すべて非対格動詞で、主語の状態を表わす動詞が主である。このグループの動詞は、主語の意味役割が対象であるが、この対象に変化が生じないのが特徴である。この点が、「変化後状態」グループの動詞と違うところでもある。

(47) 色が褪せる。

(48) 顔が映る。

(47)の「褪せる」は、「変化後状態」グループに属している動詞で、主語である「色」が変化する。濃い色から薄い色に変わるわけである。しかし、(48)の「映る」は、「状態」のグループに属している動詞で、主語である「顔」は変化しない。他の動詞も同様である。「状態」のグループは、主語に変化が生じないので、「変化」も「動作」も関与していない元々から「状態」を表わす動詞で構成されている。

表10は、「状態」のグループに属している動詞の他動性を検討したものである。

表10 グループ3に属する動詞の他動性

	意味の側面			形の側面				
	参加者 二人 以上	動作が 及ぶ	変化を 起こす	「が +を」	直接 受動文	間接 受動文	再 帰 文	相 互 文
空く	—	—	—	—	—	—	—	—
映る	—	—	—	—	—	—	—	—
掛かる	—	—	—	—	—	—	—	—
変わる	—	—	—	—	—	—	—	—

決まる	—	—	—	—	—	—	—	—
籠もる	—	—	—	—	—	—	—	—
付く	—	—	—	—	—	—	—	—
出る	—	—	—	—	—	—	—	—
慣れる	—	—	—	—	—	—	—	—
残る	—	—	—	—	—	—	—	—
載る	—	—	—	—	—	—	—	—
離れる	—	—	—	—	—	—	—	—
広がる	—	—	—	—	—	—	—	—
交じる	—	—	—	—	—	—	—	—
まとまる	—	—	—	—	—	—	—	—
別れる	—	—	—	—	—	—	—	—

表 10 を見ると、「状態」のグループに属している動詞は、原型的他動詞文の特徴を1つも持っていないことが分かる。これは、角田 (2009) の「自動性の原型は動作でもなく、変化でもない、即ち状態である」(p.91) との指摘と一致している。自動性の原型が「状態」であるということは、「状態」を表わす動詞の自動性が一番高いということである。言い換えると、「状態」を表わす動詞の他動性が一番低いことになる。

以上、形容詞的用法に現われている動詞の他動性を検討した。その結果、形容詞的用法に現われている動詞は、すべて他動性が低い動詞であることが分かった。他動性の高い典型的な他動詞は、形容詞的用法に現われないし、形容詞的用法に現われている 12 個の他動詞は、「対象が変化を被る」という意味の側面の他動詞文の特徴を持っていないので、他動性が低いことが観察された。

## 5 おわりに

本稿では、形容詞的用法に現われやすい 66 個の動詞を、3 つのグループに分け、その他動性の高低を検討し、形容詞的用法と他動性の関係を考察した。考察の結果、形容詞的用法に現われている 66 個の動詞は、すべて他動性が低いことが明らかになった。

他動性が低いということは、ヴォイスからの解放も考えられるが、ヴォイスからの解放として捉えられる意味の変質に、次の 3 つの方向が認められている。

- ① 他動性→自動性
- ② 運動性→状態性
- ③ デキゴト性→性質性

形容詞的用法に現われている動詞は、上の 3 つの方向に進んでいると考えられる。グループ 2 の再帰動詞と他動詞は、①、②の方向に、グループ 1 とグループ 3 の自動詞は、②、③の方向に進んでいると考えられる。この意味の変質からも他動性の低いことを裏付けられる。

3 つのグループの他動性を図で示すと、図 9 のようになる。



他動性の程度：

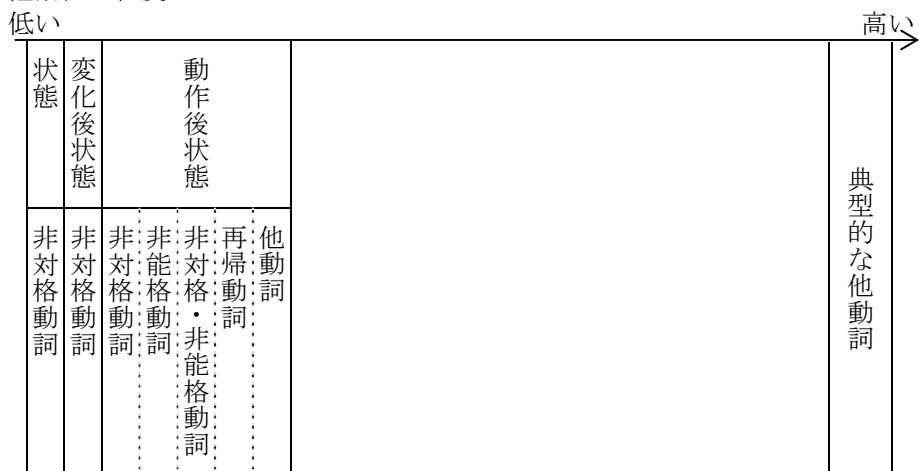


図 9 他動性の程度

図 9 から、形容詞的用法に現われやすいのは非対格動詞で、他動性の低い動詞であることが分かる。他動性の高い典型的な他動詞は 1 つも現われていない。他動詞が形容詞的用法に現われるときは、それらの他動性が低いためである。つまり、形容詞的用法は他動性の低い動詞に起こりやすく、他動性の高い動詞には起こりにくいと言えるだろう。以上の考察をまとめると、次のような結論が得られる。

形容詞的用法と他動性の関係：

1. 形容詞的用法は、他動性が低い非対格動詞に現われやすい。
2. 形容詞的用法は、他動性が高い他動詞・非能格動詞には現われにくい。
3. 形容詞的用法は、他動詞であっても、他動性が低い動詞なら形容詞的用法になれる。

図示すると、図 10 のようになる。

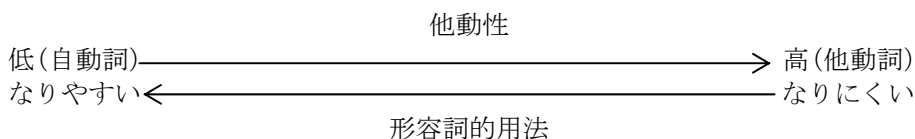


図 10 形容詞的用法と他動性の関係

本稿では、形容詞的用法に現われやすい動詞の特徴についての考察が目的であったため、「タ」形と「テイル」形との関係については考察できなかった。

今後は、形容詞的用法に現われやすい再帰動詞を、衣服の着脱という基準で下位分類し、形容詞的用法の「タ」形と「テイル」形との関係について、さらなる考察を続けたい。これを今後の課題としたい。

### 参考文献

- 金田一春彦（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房。  
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現』ひつじ書房。  
高橋太郎（2003）『動詞九章』ひつじ書房。  
角田太作（2009）『世界の言語と日本語』くろしお出版。  
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。  
——（1993）『寺村秀夫論文集Ⅰ——日本語文法編』くろしお出版。  
仁田義雄（1991）『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版。  
——（2010）『語彙論的統語論の観点から』ひつじ書房。  
森田良行（2002）『日本語文法の発想』ひつじ書房。  
ウェスリー・M・ヤコブセン（1898）「他動性とプロトタイプ論」，久野暉・柴谷方良（編）『日本語学の新展開』pp.213-248，くろしお出版。

## Transitivity in Japanese Noun-Modifying VerbalClauses

CAI Mei-hua

This paper attempts to give a unified explanation to the semantics of the verbs apt to modify the following noun as an adjective in terms of transitivity. We emphasize that this must have been explored before discussing the aspect type of the relevant verb, whether it takes a *ta*-form or a *teiru*-form.

In this paper, I took up sixty-six transitive verbs as samples, and measured their degree of transitivity. The first criterion for transitivity is whether the action of the relevant agent reaches its theme, causing a change in it. The second is whether the relevant sentence has the properties of a prototypical transitive construction. Based upon these criteria, the verbs whose theme is apt to undergo change are higher in its transitivity, and between the two verbs whose themes are apt to undergo change, the one having the properties of a prototypical transitive construction is judged to be higher in its transitivity. From the sixty-six verbs we investigated, we conclude the following:

1. Unaccusative verbs comparatively low in their transitivity are apt to modify the following noun as an adjective.
2. Transitive verbs comparatively high in their transitivity and unergative verbs are unapt to modify the following noun as an adjective.
3. Transitive verbs comparatively low in their transitivity can modify the following noun as an adjective.

Significantly, this is a principled explanation of the verbs apt to modify as an adjective.

**Key words:** modifier as an adjective, transitivity, change in theme